

氏名（本籍）	三津山 智香				
学位の種類	博士（文学）				
学位記番号	博 甲 第 9762 号				
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 25 日				
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当				
審査研究科	人文社会科学研究科				
学位論文題目	家畜守護神信仰の民俗学的研究—ソウゼン信仰を事例に一				
主査	筑波大学	教授	博士（文学）	徳丸 亜木	
副査	筑波大学	准教授	博士（文学）	山澤 学	
副査	筑波大学	准教授	博士（文学）	武井 基晃	
副査	国立歴史民俗博物館	教授	博士（文学）	小池 淳一	
	民俗研究系				

論文の要旨

本論文は、家畜やペットなど人の生活と関わる動物の守護や供養などを目的として祀られるカミに対する信仰として「家畜守護神信仰」の概念を新たに設定し、東日本を中心に展開する畜産に関わる民俗信仰であるソウゼン信仰を事例として、青森県十和田市を中心とする地域の歴史性を踏まえた畜産業の変遷と現代の畜産農家における人と家畜との関係性とそれを支える「思い」を視座に据えた人びとの信仰実践の叙述に基づく民俗学的研究である。

本論文は、第1章から第6章に、序章と終章を加えた全8章より構成される。

序章では、本論文に関わる先行研究を整理するとともに、理論的枠組みと、論文の課題三点を提示している。第一点目の課題として、文献資料を用い、日本の家畜守護神信仰の全体像を把握すること、第二点目の課題として家畜守護神の一つであるソウゼン信仰（蒼前、宗善、相染などと史資料では表記される）を事例として特定地域の家畜飼養に関わる政策や生活の変化に対応した信仰の変容を通時的・共時的に把握すること、第三点目の課題として、人びとの動物飼養に関わる日常的な生活経験が如何に信仰実践へと連続するかを検討した上でそこに示される畜産農家の「思い」を把握し、人と家畜とカミとの関係性を過去からの変化と持続という通時的・共時的観点から把握することを提示している。また、ソウゼン信仰についての筆者による主なる調査対象地域を、藩政期からの馬産地であり近代・現代にわたって畜産業が継続されて来た青森県十和田市を中心とした地域に定め、その地域の概要について説明を行っている。

第1章「家畜守護神」の検討では、今日までの民俗信仰研究では「牛馬守護神」として規定されて来た家畜守護に関わるカミについて、自治体史や民俗調査報告書における民俗資料と著者の調査資料の整理からその分布上の特徴を検討している。その上で、牛馬という動物に限定された概念ではなく、畜産農家が飼養する家畜や愛玩動物としてのペットを守護するカミ全体を包括する概念として「家畜守護神」を提示し、その有効性について論じている。

第2章「ソウゼン信仰の地域差」では、家畜守護神信仰の内、具体的にソウゼン信仰を取り上げ、収集をな

しえた書誌資料より、東日本を中心とした分布傾向を明らかにしている。地域による名称や祭祀内容の差異を明らかにし、寺社縁起に示される貴種の乗り物という馬に対する認識が馬を育てる人びとにも飼育の目標として志向されたと指摘し、地域の歴史的文脈の中でソウゼン信仰を理解する必要性を論じている。

第3章「近代までの牛馬飼養とソウゼン信仰」では、青森県南部地域の藩政期と近代にかけての馬産に関わるソウゼン信仰の実態を論じ、藩政期の同地域において馬産が重要な生業であったことを指摘している。更に、近代においては軍馬補充部の設立により、馬産が単なる個々の農家の生業としてではなく国家の政策や軍需とも関わる生業であったとしている。重ねて、十和田信仰や芸能の展開により、藩領にソウゼン信仰が受容され、近代には軍馬補充部にもソウゼンが祭祀されるなど、民衆と支配層のいずれにも馬産と関わるソウゼン信仰が展開していたことを論じている。

第4章「高度経済成長期における畜産飼養の変遷」では、高度経済成長期における十和田市の畜産業が馬産から、乳用牛、肉用牛、豚の飼育に変化したことを地域の統計資料を用いて論じている。本章では、筆者の二集落における調査資料に基づき、畜産業を取り巻く流通・経済的環境や住民の衛生意識の変化などの影響を受けつつ、個々の畜産農家は如何にその飼育する家畜や飼育方法を選択し変えていったのかをその生活実践から検討している。その上で、地域の家畜飼養が馬の飼養から牛や豚などの飼養に変化し、そこでは飼養に関わる「手間」と、流通機構を通じての販売による「儲け」が意識されたことを論じ、家畜が飼養農家に帰属すると同時に常に「商品」として外部との連続性を有していたことを論じている。

第5章「ソウゼン信仰の変遷と現状」では、地域の家畜飼養の変遷を踏まえた上で、ソウゼン信仰が如何に変遷し、継承・保持されたかを論じている。青森県南部地域や岩手県北部地域のソウゼン信仰の拠点である青森県上北郡おいらせ町の氣比神社の家畜の姿が描かれた絵馬を頒布する絵馬市の観察調査から、絵馬の畜産農家への頒布・流通のありかたと、絵馬に示された家畜の表現の特徴を検討し、更に、家庭内で絵馬がどのように空間的に配置され信仰実践が示されるかなどに着目し、絵馬に表現される畜産農家の家畜への「思い」の析出を試みている。次いで、家畜飼養が衰退した集落での調査を通じて、既に家畜守護の役割が求められなくなったソウゼンが集落神社としての信仰実践を継続的に受けている事例を検討している。以上を踏まえて、ソウゼンがその守護の対象とする家畜が畜産農家の「商品」として飼養・流通する乳用牛、肉用牛、豚など家畜各種全体に拡大していること、ソウゼンが家畜を守護するという機能が、畜産農家の守護神としての意識へと連続し、更には人そのものの守護神として認識されるようになったことを論じている。

第6章「畜産農家・家畜・ソウゼンの関わりから捉えるソウゼン信仰」では、個人の信仰実践を個々の畜産農家の労働実態や、講習会などでの飼育に関わる知識の習得、家畜市場における「商品」として販売・流通の場をも踏まえつつ、個々人の「思い」をそれぞれの語りや行為の実践に基づいて把握し、そこに見られる「思い」のありかたの差異がソウゼン信仰に関わる信仰実践の差異としても表出していることを論じている。

終章では、以上の各章における論述を総括した上で、家畜守護神信仰が、国家政策や市場動向、家畜飼養に関わる技術展開の影響を背景とした地域の家畜飼養の変遷に対応しつつ、人びとの「思い」に基づく信仰実践を伴いながら継承されてきたことを述べ、現代でも畜産農家にとって家畜飼養を円滑に持続するためのものとして大きな意味を持っていることを指摘している。

その上で、民俗学研究における「信仰」の把握には、人びとの日々の生活とその生活経験に応じてつむがれる「思い」と、その表現としての信仰実践を総体的に把握する必要があることを論じ、本論文の結論としている。

審査の要旨

1 批評

本論文は、従来の民俗学研究において東北地方の馬産に関わる特徴ある民俗信仰とされてきたソウゼン信仰を中心として、家畜飼育に関わる民俗信仰事象についての自治体史や調査報告書からの膨大な事例収集とその整理に基づく精緻な実態分析を行い、家畜守護神信仰という新たな概念を提示した上で、家畜飼育に関わる生活経験と信仰実践、それに伴う「思い」に着目し、民俗信仰研究の新たな研究視点を提示した優れた論文である。藩政期から近代にかけての馬産から、現代における乳牛・肉牛・豚の飼養という十和田地域の畜産業の歴史的展開を、その背景にある政策や経済的要因などとの関連から把握し、現代の畜産農家の生活経験の変化と実態とを論ずる。更に、そこに形成される「思い」がソウゼンという伝承性を持った民俗信仰を対象とした信仰実践として如何に構築され、また表現されているかを緻密に描いている。対象や組織、説話といった従来の信仰研究の枠組みを相対化し、信仰実践を具体的にとらえる視点を加えることで、信仰を複層的かつ創造的なものとして把握する可能性を提示することに成功しており、その研究視座は、民俗学の信仰研究における新領域の開拓とも位置づけ得る。また、近世・近代の牛馬飼養や支配層のソウゼン信仰に関わる史資料を活用しつつ統計データ等から地域における牛馬飼養の変遷との関連を解明しようとする姿勢、あるいは、絵馬という図像・文字資料の空間配置への着目や、信仰実践から家畜飼育に関する「思い」を検討する研究視角は、本論文を単なる民俗事象の研究に終わらせず、民俗信仰研究の方法論的検討を行うものとしての厚みを加えている。このことは現代における民俗研究の成果を人文学全体の中にどのように位置づけるかという問題についても示唆的であり、学際的研究の可能性として拡張していくことが可能である。

ただし、文献より民俗事象を集積する際の史料批判や、寺社縁起や口承文芸、あるいは史資料に表現されるソウゼン信仰の検討が不十分である点、人と動物の交渉史に関する先行研究の参照が限られている点、あるいは、牛馬の飼育や繁殖に深く関わっていたバクロウや地域の宗教者の関与についての論述が浅い点など今後、検討すべき課題も残されている。また、本論文で論じられている「思い」の概念については、世代間での継承性や、個人や個々の家を超えた集合性があるのかなど更なる検討が必要とされる。

しかしながら、本論文は、近年の民俗学研究において十分着目されて来なかったソウゼン信仰研究に関して、新たな概念を用いて多面的な研究視角からその分析を試みている。また、生活における信仰実践や「思い」を研究の視座に含め、家畜をさまざまな意味や価値を投影できる存在と位置づけることで、人と動物の関係を民俗としてとらえる視点を深化させ生業に関わる民俗信仰研究を大きく進展させる可能性を提示している。家畜の飼養を軸にした人間文化の総合的研究への萌芽を有している点なども高く評価できる。学界への貢献も大きいものとして、本論文を博士（文学）の学位を授与できるものとして判断する。

2 最終試験

令和3年1月18日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。